



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における縄文時代の墓と社会 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	藤原, 秀樹
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16492号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94954
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hideki_Fujiwara_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 藤 原 秀 樹

審査委員	主査	教 授	高 瀬 克 範
	副査	特任教授	小 杉 康
	副査	准教授	蓑 島 栄 紀
	副査	准教授	國 木 田 大

学位論文題名

北海道における縄文時代の墓と社会

・当該研究領域における本論文の研究成果

本研究の目的は、墓を通して北海道島の縄文社会の特徴とその変遷を解明する点にある。考古学において、墓は過去の社会を復元するための重要な資料となっており、北海道島の縄文文化においても一定の研究蓄積がある。しかし、その多くが副葬品の豊富な後・晩期を中心とする研究であり、当時の墓の主流であった土坑墓や、空間構成が把握しやすい遺跡に検討が偏る傾向があった。本論文は、従来のこうした研究を踏まえつつも、250例近くにのぼる縄文人骨をともしう墓、250以上の遺跡で発見された計4,000基以上の土坑墓のほか、貯蔵穴転用墓、貝塚・盛土遺構・住居への埋葬、土器埋設遺構、焼人骨など膨大な事例を検討対象としており、扱う情報の悉皆性においてこれまでにない研究となっている。そして、数千年間の長期におよぶこれら埋葬関連資料を一貫した基準のもとで分析することによって、埋葬行為の画期やコミュニティ構成員間の関係の変化を捉えようとしている点に大きな特徴がある。

本論文は、土坑墓以外にも存在していた様々なマイナーな墓の出現・展開過程、墓の作り方や墓地における儀礼行為の復元、被葬者の性別・年齢と副葬品の対応関係など、重要ではあるがこれまで体系的に吟味されてこなかった多くの問題を明確化することに成功している。加えて、北海道島における縄文社会との関連においては、以下の3点で学界への重要な貢献を果たした。第一に、縄文後期前葉と中葉のあいだに、埋葬行為の大きな画期がある点を明らかにした点である。すなわち、後期中葉以降に集落から離れた墓地が造営されるようになるだけでなく、埋葬行為を規定する原理が、被葬者個人の属性にもとづく個別的・臨機的なものから、より上位の社会的ルールにしたがったものへと変化した点が明らかにされた。第二に、後期後葉に営まれた北海道島に特徴的な周堤墓の利用主体が、造営過程の復元、墓地の構成、堅穴住居との類似性などからみて、当時の世帯もしくはいくつかの世帯のまとまりであったと考えることができる可能性を指摘した点である。第三に、墓造営のための労働力の投資や副葬品の組合せなどの詳細な分析から、後期後葉の周堤墓後半期以降にコミュニティ構成員間の格差が顕著になることを明らかにし、その状況を説明するために複数の職能集団の代表者が尊敬を集める松木武彦氏のいう「ヘテラルキー（多頭の階層）」社会という考え方の有効性を示した点である。これまで、比較的単純な垂直的社会分化が念頭におかれることが多かった当時の社会複雑化の議論に、一石を投じるものである。

北海道島における縄文文化期の埋葬行為の全体像を俯瞰し、そこを足がかりとして各時期の社会像にも踏み込んだところに本論文の価値がある。埋葬関連資料や社会復元にかかわる今後の考古学的研究はもちろん、異分野からも検証されるべき仮説をも数多く含んでおり、多方面から参照される北海道島縄文墓研究のひとつの到達点と評価される。審査委員会においては、遺構の系統関係や発生過程の論証に不十分な箇所がある、本州島を含む縄文文化全体の研究動向との対比が弱い、環境変化と社会変化の関係がまだ表面的な議論にとどまっている、などの問題点が指摘された。取り扱った事例の膨大さと、それでも残る情報が少ない時期の存在などゆえに課題が残ることは確かである。

ある。しかし、今後の北海道島縄文社会の研究にとって避けて通ることができないという点で基準となる意味をもち、考古学だけでなく他分野の研究者にとっても有益なデータや取り組むべき仮説をそなえた内容の包括性とそこから生じる波及効果をも考えあわせると、上記の課題は必ずしも本論文の意義を大きく損なうものではない。口頭試問において、申請者自身もこうした問題と限界を自覚しており、今後の資料増加や関連学問分野の新たな成果を睨みつつ、それらを克服するために的確な展望を持っていることが確認された。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は全員一致して学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。